

# 『発心集』における伝承—『今鏡』との関連をめぐって—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-02 キーワード: 作成者: 藤島, 秀隆 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00064218">http://hdl.handle.net/2297/00064218</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 『発心集』における伝承

——『今鏡』との関連をめぐって——

藤 島 秀 隆

## 一 はじめに

多武峯少将藤原高光・照中将源成信・光少将藤原重家・権中納言源頭基などの平安朝貴族の出家譚は、当時から著名であったとみえ、今日に至るまでの多くの諸書に収録されている。これら公達の純粹・誠実な生き方に一つの衝撃が加わると、突如世をはかなみ発心を決意し遁世する。彼らは将来を嘔目されていたエリート貴公子であるから、世人は驚愕し更に感動する。「あはれにいみじき」人々であるがゆえに、『栄花物語』・『大鏡』・『今鏡』・『宝物集』・『古事談』・『発心集』などの作者によって採録されたのは当然のことであろう。

『栄花物語』の作者が重視した「あはれ」なる人物の一人、高光出家に関する評論は、「あはれなることには、この御事をぞ世にはいふ」（日本古典文学大系本に拠る）とある。『大鏡』（師輔）には「多武峯の少将高光出家したまへりしほどは、いかにあはれにもやさしくも、さまざまなる事どものはべりしかは」（角川文庫本に拠る）と記され、『今鏡』では「昔こそ若き近衛のすけなど、世を遁れて山に住み給ふとは、古き物語にも聞え侍るに、これこそ哀れに悲しく」（日本古典全書本に拠る）と見える。かような評論から、世人の心を深く感動させた人物像の伝承を窺い知ることが出来る。

『栄花物語』の世界で、双壁とされた高光と右馬頭頭信の出家譚は、『今鏡』では成信・重家出家譚がそれにあたる。更に『古事談』の世界でも、成信・重家と頭基の出家譚が対比すべき説話と言える。さて、現存本の『発心集』（八巻本）には、巻第五に統理・頭基成信・重家・高光などの出家譚が連続的に収録されている。一方巻第二には長明自身、傾倒し敬慕したところの慶滋保胤（寂心）及び保胤と源信に師事した大江定基（寂照）の出家・往生譚二話を連続採録している。これらはいずれも『今鏡』と関係ある説話と言えよう。山内益次郎氏は『今鏡』から伝承されたと思われる『発心集』の説話は八編あると指摘している。次に『今鏡』と『発心集』との関係説話の項目を表示しよう。

### 『今鏡』

① 昔語九「真の道」

② // 九 //

③ // 九 //

④ // 九 //

⑤ すべらぎの上一「望月」  
藤波の中五「昔の衣」

### 『発心集』

巻二15◎内記入道寂心事

巻二16◎三河聖人寂照入唐往生事

巻五53◎少納言公経依先世願作河内寺事

巻五54◎少納言統理遁世事

巻五55△中納言頭基出家籠居事

⑥藤波の中五「苔の衣」

⑦御子たち八「月の隠るゝ山のは」

⑧昔語九「賢き迺々」

△注ノ◎印は直接書承が認められる。酷似。

◎印は部分的に類似。

△印は明らかに他書からの伝承。

本稿では、『今鏡』から『発心集』への伝承説話の考察を主体として、私見を述べてみたいと思う。

なお、引用本文は『発心集』（校註嶋長明全集本）、『今鏡』（日本古典全書本）に拠った。

二『今鏡』昔語と『発心集』卷二の構成

先ず、『今鏡』昔語を略述してみたい。

昔語の巻頭「葦たづ」で語り手の老嫗が、

おのづから見聞き侍りし事も、事の続きにこそ思ひ出で侍れ。かつは聞き給へりし事も確かにも覚え侍らず。伝へ承りし事も、思ひ出づるに従ひて申し侍りなむ。かたちこそ人の御覧じ所なくとも、古の鏡とも、なかなかり侍らざらむ。

と語り始める。冒頭の説話は、清和天皇崩後、東宮御息所の御写経供養の願文を書いたという物語で、橋広相（贈中納言）の日記に書かれていると伝える。この日記は現存せず、『十訓抄』第五の類話では、供養願文の作者は広相と見える。次の枇杷大納言延光の説話は二話記載されている。前者は『十訓抄』巻第十にも「村上天皇賞雅材文才補藏人給事」として伝え、後者も巻第五に「村上天皇崩後延光夢賜御製和之事」に収めてある。「祈る験」の条は、慈惠大僧正

及び僧正寛朝の説話で、類話は『十訓抄』巻第一の「四納言事」に

載るが簡略記事である。続いて禅林院の僧正深覚の二つの物語、前

者の法蔵破壊と修理説話は『古事談』第三・『十訓抄』第七にも載

せてあるが、後者の囲碁を進めて大一条殿教満の病を癒す説話は『古

事談』第三のみに収載されている。次の有国（勘解由宰相）説話は

、父輔通（道）が子有国の孝養に依って蘇生し、閻魔庁より帰還す

る物語で類話は『古事談』第二・『十訓抄』第十に見える。続いて

官吏相尹の物語は、相尹が親修僧正の修法に依って播磨守に任ぜら

れたという説話で、除目執筆筆性異譚として『古事談』第一に類話が

ある。「唐歌」の条の後半には、藤原義忠が藤原資業の詩を非難し

て宇治殿（頼通）に譴責されたという説話、藤原為時が申文に依って

源國盛に代り絨前守に任ぜられた説話の二話が収録されている。両

話の類話は、例えば『今昔物語集』巻第二十四・30に見える。

如上、「葦たづ」「祈る験」「唐歌」の条の説話は『古事談』

『十訓抄』等へ伝承され、内容的に共通もしくは部分的に同文と思

われる説話が採録されている。特に『十訓抄』の説話とは関連が顕

著である。

しかるに、次の「真の道」の条においては、第一話保胤、第二話

定基の出家往生譚、第三話統理、第四話公経、第五話定俊の順序

で、説話排列がなされ語られている。第五話を除き、他の説話は

『発心集』に伝承されている。「賢き道々」の条では、常陸守実宗

説話に続いて、笛の名手市佑時光、用光に関する説話を二話載せて

いるが、前半の物語は『発心集』に収録されている。昔語の巻末は

朗詠の名人譚、歌人能因法師譚で終る。老嫗の語りは、

老いたる法師の伝へ語り侍りしを、外にて伝へ聞き侍りしか

ば、おほつかなかく侍り。いづれの歌をぞ申すべけれどもなど、

語り侍りしかども、忘れて確かにも覚え侍らず。  
と結んでいる。

『今鏡』と『発心集』との関係ある八説話中、五編の説話が前述の如く、昔語の物語から『発心集』へと伝承されたことに刮目しなければならぬ。

ところで、『発心集』（八巻本）は第一巻から第六巻までと、第七巻・第八巻の二部に大別出来るが、築瀬一雄博士は、同一人によって編纂されたものと考えられることは出来ない<sup>三</sup>と述べておられる。『本朝書籍目録』は発心集三巻鴨長明作と伝え、また、他の古書籍目録に四巻・五巻・六巻などと載る巻数については夙に先学によって指摘せられている。原発心集を三巻と推定した場合、流布本八巻本の巻七・八は別人による加筆、更に巻六以前の巻及び説話にも後人による増補があると推断する可能性はあろう。その一方、どの巻、どの説話が、長明の執筆と断定することはかなり危険ではあるが、少なくとも八叡山天台∨三井寺∨関係者の説話は長明的と言えるのではあるまいか。

『発心集』には、比叡天台・三井寺関係の記事が顕著である。試みに、『発心集』に現われた天台関係の僧侶及び関係者を列挙してみよう。( )は説話番号を示す。

△巻一∨ (1)三井寺の道顯僧都 (3)平等供奉 (4)千銀内供・空也上人 (5)多武峯増賀上人 (7)横川尊勝の阿闍梨陽範 (8)天王寺聖

△巻二∨ (3)安居院に住む聖 (4)寂心 (8)寂照 (9)仙命上人・覺尊上人 (10)案西聖人 (11)相真・運俊 (12)鳥羽僧正・真淨房 (13)入道寂因

△巻三∨ (1)或女房参天王寺 (2)書写山の客僧

△巻四∨ (3)淨藏實所 (4)寂実阿闍梨

△巻五∨ (8)唐房法橋行園 (12)極楽房阿闍梨 (14)少納言統理

(15)中納言頭基 (16)成信・重家・高光 (17)禅仁法印 (18)正算(勝算)僧都

△巻六∨ (1)智興(空)内供・證空阿闍梨 (2)一乘寺僧正増譽・后宮半者

△巻七∨ (1)惠信僧都 (2)空也上人 (3)左中将雅通・藤原道雅 (4)三井寺の貧僧 (5)惠信僧都 (6)源親元

△巻八∨該当者なし

右のように、叡山天台に関わりある人物の記事が随所に散見している。とりわけ巻一・巻二・巻五に天台関係説話が多い。『今鏡』との関連という観点から、次に『発心集』巻二の構造を粗描することにしよう。

『発心集』巻二の構成 説話番号○印は八叡山天台∨関係の説話を示す。

番号	主人公	説話	内容
⑬	安居院に住む聖	安居院に住む聖が大路つらなる井のかたわらで下主の尼が物を洗うのに出合った。呼びとめた尼の案内で小さな家に住む年たけた一人の僧と対面した。隠居僧との約束に従い、彼の臨終に立ち合い死を見とどけた。その後、僧の住んでいた家を尼に譲った。この尼と僧とは、ふとした思いがけぬ縁が出来て、僧の	

14	<p>永観</p> <p>唯一の知る辺になつてきたという話。</p> <p>(一)永観が東山禅林寺に籠居した話 出家をして、貧者には念仏を以て借銭の代を贖わせた話。</p> <p>(二)白河院に推挙され、東大寺の別当となつて、寺の復興に尽力した話。</p> <p>(三)悲田の梅と呼ばれたという話。</p> <p>(四)算木を置いて念仏の数を教えた話。</p> <p>(五)東大寺拜堂の折に余りに異様であつた話。</p> <p>(六)法勝寺の供僧を望んだ話。</p> <p>(七)臨終に大乘十二部経の首題の名字を唱えよといつた話</p>
15	<p>寂心 (慶滋保胤)</p> <p>(一)参内の途中、石帯を失ない泣いている女に自分の帯を与えた話。</p> <p>(二)六条院に召されて行く途中、馬の道草にまかせ、また道の側に卒都婆があるたびに乗馬から下りて礼拝した話。</p> <p>(三)保胤の乗馬を舍人が打つと、保胤は過去(前世)の父母を打つのかといつて泣いた話。</p> <p>(四)増賀上人の弟子となる話。保胤が「止観明静前代未聞」に感泣した話。</p>
16	<p>寂照 (大江定基)</p> <p>(一)もとの妻を捨てて参河守となつて任国へ行く。その国で新妻の死にあい、無常を感じ発心する話。</p>

17	<p>仙命 覚尊</p> <p>(一)出家後は、本の妻の前に乞食して自分自身の道心を試した話。</p> <p>(二)東山如意輪寺に住して寂心に師事。その後、横川に上つて源信に法を習う。(寂心滅後)法を求めて渡唐した話。</p> <p>(三)(長久七年)遷化の時、辭世の詩歌をよんで往生した話。</p>
17	<p>仙命 覚尊</p> <p>(一)仙命が持仏堂で観念する間に、空から声あつて、叡山三聖が仙命の発心した時より守ると告げた話。</p> <p>(二)小法師に山の坊を廻らせて得た食物以外、一切求めず、后宮自ら縫つた袈裟を与えること、「三世の諸仏得給へ」と谷へ投げ捨てた話。</p> <p>(三)東塔の鎌倉に住む鎌倉が、仙命のところまで板敷のない所に落ち、「あな悲し」と叫ぶを聞いて、「御房は不覚の人かな。……南無阿弥陀仏とこそ申さめ」といつたという話。</p> <p>(四)仙命が覚尊の住む鎌倉へ行った時、覚尊が万の物にこごとく封を付けた話。</p> <p>(五)覚尊死去後、仙命の夢に現れ、仙命の上品上生すでに定まっていることを告げた話。</p> <p>(六)覚尊が鴨河原で飼馬を見て憐み繩を切つた。馬主から馬盗人といわれ捕われた。檢非違使に覚尊と名乗ると、最もあさましき</p>

⑱		相真	⑱ 楽西
<p>(一)津国渡辺の長柄別所に住む僧暹俊は、山の</p>	<p>態なりといわれ、解き放された話。</p> <p>(一)津国妙法寺に住む楽西は出雲國の人で、かつて田を耕作する時に、牛を打ちせめるのを見て発心した話。</p> <p>(二)ある僧の住む庵を訪れ、主の不在中にあがり込み、火をたき背をあぶっていた。立ち帰った主と火たきの問答の結果、相手を得心させ、その後、人里遠く離れた山中に庵をかまえたという話。</p> <p>(三)平清盛からの贈り物をあちこちに分け与え、自分は少しも取らなかった。ある僧の間に「貧乏人の僅かばかりの布施は自分が受けなければ、誰が少しの布施で彼らの意をさつし報いることが出来るか。布施を返すことは、自分の罪業のみ恐れ、人々の罪業を救う心に欠けている」と答えた話。</p> <p>(四)山寺近くに住む貧乏人のやまめに常に施しをしていたが、ある夜更け、餅を持って行った帰途、念珠を落し、それを鳥が発見して返した話。</p> <p>(五)ある夏、庵の前の小さな池に例年の如く咲くはずの蓮の花が咲かぬのを見て、死期を悟り往生した話。</p>		

⑳		真浄房 鳥羽僧正	<p>暹俊 弁永</p> <p>(一)鳥羽僧正の弟子真浄房は、往生を願う心が深く、師の許しを得て、法勝寺三昧堂に住み僧坊でひまなく念仏して月日を送り、乞食を憐み、物をとらせた。また隣の坊の叡泉坊もらい病患者に物をとらせたという話。</p> <p>(二)師の病氣を見舞った真浄房は、師の僧正が臨終を前にして別れを惜しみ泣くのを哀れに思い、後世でも必ず仕えんと無分別に約束した。僧正はうれしく思い、まもなく往生した。その後、叡泉坊も地藏の名を唱えて往生した。</p> <p>(三)真浄房は二年後に物ぐるわしき病で死んだ。彼は物の怪となって往生できず母にとりついたという話。</p>
---	--	-------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

24 舍衛国の老翁	23 或上人	22 橋守輔	㊸ 前灘口助重 入道寂因
釈迦如来が舍衛国にいた時、弟子の阿難尊者を伴ない歩いていたら折、あやしげな翁と女の	年来道心深くして念仏を怠らぬ聖は、尋ねてきた知人を大切なことがあるといつて帰してしまう。弟子が問うと「受け難い人身を得て、極楽を願うことは自分にとって極まる営みである。修業することが大事である」といった話。	橋守輔は八十余になっても仏法を知らず、齋日でも精進しなかった。彼は伊予国に下り永長元年六月に往生した。死ぬ一昨年より夕刻になると西に向い発願文（一紙）を読んでいたという話。	<p>(一) 近江国蒲生郡の人助重は、盗賊のため射殺されたが、矢が背中に当たった時南無阿弥陀一仏と一声いい死んだ。人々がかけつけて見ると、彼は西に向い座って往生していたという話。</p> <p>(二) 助重の知人入道寂因は夢想によって往生人助重の死を知らされる話。</p> <p>(三) ある僧が近江の国で修行中、「今往生人のあり。行きて縁をむすぶべし」と夢告あり。行った所が助重の家であったという話。</p>

25 善導 (中国)	(印度)
往生への疑問は、志深くして怠ることなく信じていれば、解消する。疑うことはあり得ないと説く話。	二人連れに出合った。白髪で顔はしわだらけ、骨と皮ばかりでやせおとろえていた。これを見て釈迦が二人共長者・聖者になれなかったのは、宿善を持ちながら願わなかったためであり、勤行を怠ったためであるといった話。

巻二の収録説話数は十三話であり、全体的に小話が多く、単に小説話を羅列しているに過ぎない。巻頭は安居院に住む唱導説経僧を登場させている。安居院聖が澄憲またはその子の聖覚を指すのかは不詳である。『古事談』(第三)には安居院澄憲に関する説話が二話収載されているが、本話とは異なる。安居院聖と長明との関係は詳かでない。しかし冒頭説話に唱導の安居院聖を排列した点は注目し得る。大原に隠棲したことのある長明と天台念仏聖との交流を示唆した説話と理解出来る。口承の説話としての色彩が濃厚ではあるまいか。なお、冒頭文の「なすべき事有て京へ出でける道に大路つらなる井のかたはら」で一人の尼と出合う条は、巻七7で空也上人が松尾大明神と対面するくだり、「七月ばかりに京になすべき事ありて、朝かげに大宮の大路を南さまへおはしけるに、おはがきの辺」で出合う構成と類似している。14 禅林寺永観律師の説話は、『拾遺往生伝』<sup>注</sup>巻下「前権律師永観」に基いて(一)(二)の説話を構成していると考えられる。ただし、『往生伝』に載る七宝の塔婆を造

立し仏舍利二粒を安置したが、後に四粒に増していたという話。また、常のことぐさに、「病は是善知識也。我苦病に依りて深く菩提を求む」といった話などは、『発心集』では採録せず、『古今著聞集』（巻第二）に載る。『古事談』（第三）には(二)(四)(六)の話は載らず、(一)(五)もやゝ異なっている。本話では念仏が強調されているが、(一)(二)は人情に富む永観像が語られている。(15寂心、16寂照は後述)。17仙命上人説話は、『拾遺往生伝』（巻上）「仙命上人」伝と全く異質である。『古事談』（第三）「仙命不受人信施事」には(二)(四)の類話が載るが(一)(三)(四)の小話は見えない。(五)は他書になく『発心集』のみ収録してある。仙命と覚尊は同時代の人間で天台独特の典型的な往生人であったと言えよう。18楽西聖人、19相真・暹俊の両話は撰津の国渡辺の話とする。二話一類形式で、『方丈記』福原遷都視察の条と関わりあると思われる。長明が撰津の国を訪れたことは、『鴨長明集』に見えている。

津の国へまかる道に、こやといふ所に泊りて待るに、ねやのさうじにあやしげなる手にて手ならひをして待るかたはらに、書き付けける。

津の国のこやのあしでぞしどろなる難波さしたるあまの住ひぞ本話は、長明が撰津の国で聞いた話とすれば、口承説話であろう。(三)の小話は権力者清盛への抵抗と批判が汲み取れる。長明も『方丈記』で執政者に対して厳しい批判を下している。20は鳥羽僧正に關連ある小話で、思慮分別を説いた書き込みと思われる説話評論が末尾に見える。21前滝口助重の話は『後拾遺往生伝』（巻下）・『本朝新修往生伝』に基づいて説話構成しているが、『往生伝』記載と同様である。(一)は17の(三)と類似し一脈通ずるものがある。共に称名念仏である。22橋守輔説話も『拾遺往生伝』（巻中）より引用して

ある。2122は後人による増補が極めて強い説話と考えられる。23念仏おこたらぬ聖の話は教訓的内容となっている。24舍衛国の老翁（印度）、25善導和尚（中国）の両話は、異国説話である。『発心集』序文「天竺震旦の伝へ聞く事は、遠ければかかず」に反する採録である。当然、後人の手になる増補と考えてよいのではあるまいか。

さて、1516の両話は總体的に『今鏡』から直接書承された説話と考える。先ず、15内記入道寂心の説話(一)(二)(四)段は、『続本朝往生伝』所載の慶滋保胤伝には見えない。伝の内容と『発心集』所収の本話とは別系統であろう。ただし、(一)(二)段の主旨と類似した簡明記事が伝に「雖乘強牛肥馬、猶涕泣而哀、慈悲被禽獸」とある。『今鏡』と『発心集』との本話を対比すると、(一)(四)段の話は『今鏡』に酷似している。保胤の奇行譚である(二)(三)は『今鏡』に見えない。(二)段の最初二行「中務の宮の文習ひ給ひける時も、少し教へ奉りては、ひま／＼に目をひさきつゝ、常に仏をぞ念じ奉りける。」は、類似表現が『今鏡』に

中務宮具平の、もの習ひ給ひけるにも、文少し教え奉りては、目を閉ぢて仏を念じ奉りてぞ、怠らず勤め給ひける。

とある。そのあとの説話は、『今昔物語集』（巻第十九—三）「内記慶滋保胤出家語」からの伝承と思われる。(三)段の類話も『今昔』に載る。しかし、(三)段末尾の「池亭記とて書きおきたる文にも、「身ハ朝ニアリテ心ハ隱ニアリ。」とぞ侍るなる。」とある記事は、『今昔』に見えない。『今鏡』に「池亭の記とて書かれたる書侍なるにも、「身は朝にありて、心は隱にあり」とぞ侍るなる。」とあって類似している。『今昔』の保胤説話は、説話構成上の典拠が未詳であり、従って、『続本朝往生伝』とは同原でない。『発心

集』の本話(二)は『今昔』では順序が逆である。本話(一)(二)(三)は『今鏡』・『今昔物語集』に基づいて構成されたと考ええる。なお、一面(三)の説話の典拠を『発心集』は『今昔』からの書承ではなく、『今昔』と同原の別の文献から伝承されたとする仮説も成り立つ。この点は後考を俟ちたいと思つ。

ところで、本話で注目すべきは保胤の著『池亭記』について触れていることである。長明が保胤を尊敬し、傾倒していたことは、『方丈記』の文章が『池亭記』を拠所としている点からも頷ける。次に16寂照説話について、『今鏡』と『発心集』の本文を対比させてみよう。(傍線筆者による)

発心集(校註鴨長明全集本)

①此参河の聖と云ふは、大江宗基と云ふ博士是也。参河守に成りたりける時、もとの妻を捨てて、たぐひなく覚えける女を相具してくだりける程に、<sup>1</sup> 国にて女病を受けて、つひにはかなく成りにければ、なげき悲しむ事限なし。恋慕のあまりに、取りすつるわざもせず日比ふるまゝに、成り行くさまをみるに、いとどうき世のいとほしき思ひしられて消心を発したりける也。

②かしらおろして後、乞食しありきけるに、我が道心は実に発りたるやと心見んとして、妻のもとへ行き物をごひければ、女是を見て、「我にうきめみせし報にやかゝれとこそは思ひしか。」とて、うらみをして向ひ笑いたりけるが、更に何ともおほえざりければ、「御身のとくに仏にならむ事」とて、手をすり悦びて、出でにけり。

③さて彼の内記の聖の弟子に成りて、東山如意輪寺にすむ。其の後横川に上りて、源信僧都にあひ奉りてぞ、深き法をば習ひける。かくて終に唐へ渡つて、いひしらぬ験どもあらはしたりければ、大師

の名を得て、円通大師とぞ申しける。

④往生しけるに、仏の御迎の衆を聞きて、詩を作り、歌を詠まれたりける由、唐より注しおくりて侍り。笙歌遙聞孤雲上、聖衆来迎落日前。雲の上にはるかに染のおとすなり人や聞くらんひが耳かもし。

今鏡(日本古典書本)

①その三河の聖定基も博士におはして、大江の氏の上達部光光の子におはしけるが、三河守になりて国へ下り給へりけるに、類なく覚えける女を具しておはしける程に、女みまかりにければ、悲しみの余りに、取り棄つる事もせず、形まかりける様を見て、心を起して、

②やがて頭を剃して、都に上りて、物など乞ひ歩きけるに、元の妻にてありける女、「われを捨てたりし報いに、かゝれ」とこそは思ひしに、「かく見なしたる事」など申しければ、「御徳に仏にならむ事」とて、手を摺りて、喜び給ひけるとぞ伝へ語り侍る。

③さて内記の聖保胤を師にはし給ひて、東山の如意輪寺におはし、横川に登りても、源信僧都などに、深き御法の心汲み尽くし給ひて、<sup>4</sup> 惟仲の平中納言の、北白河にて六十巻講し給ひけるには、覚運僧都のまだ内供におはしける時、講師せさせ給へり。この三河の入道定基は、読師とかやにてこそは、法華經の心釈き頭はせる書も、点じしたゝめて、そこばくの聴衆ども居なみて、各々読みしたゝめられ侍りけれ。かくて後にぞ、山・三井寺の僧たちも、易らかに読み伝へ給ふなる。✓

遂に、唐国におはしても、いひ知らぬ事どもおはしければ、大師の御名得給ひて、円通大師とこそは聞え給ふめれ。

④かくれ給ひけるに、仏迎へ給ふ衆の音聞えければ、それにも詩作

り歌詠みなどし給ひたる、唐土より申し送り侍るなる、笙歌遙かに  
開ゆ孤雲の上 聖衆来迎す落日の前 とか作り給へりける。歌は、  
雲の上に遙かに楽の音すなり人や聞くらむ僻耳かもし と詠み給へ  
りけるとぞ聞え侍りし。

『発心集』の傍線部アイウの箇所は、『今鏡』には欠けている。  
一方、『今鏡』③のオの箇所は、『発心集』では省略されている。

①②③④各段の説話は『今鏡』に酷似していると言えよう。『続本  
朝往生伝』収載の大江定基伝には①③④が収録されている。②は載  
っていないが、次第乞食の記事はある。また、③段中、寂照が横川に  
上って源信に法を習う記事は、『往生伝』に見えない。しかし、  
『往生伝』が載せる、寂照が渡唐前に山崎の宝寺で母のため法華八  
講を盛大に営んだ話、大宋国での飛鉢の話は『発心集』に採られて  
いない。定基伝の中心部は右の両話が占めている。『今昔物語集』  
(巻第十九—二)「参河守大江定基出家語」には、①②段を載せて  
いるが、内容上一部異なる。飛鉢の話は『今昔』にも見える。『今  
鏡』②のニ「伝へ語り侍る」ということから、定基譚が語り広め  
られていた形跡が窺える。このように、長明は直接的に『今鏡』か  
ら書承し、『往生伝』は参考資料的存在であったと思われる。人物  
排列も『続本朝往生伝』・『今鏡』・『発心集』が保胤・定基の  
順、『今昔物語集』のみ逆排列で定基・保胤の順となっている。

康頼『宝物集』(下)に「阿弥陀ノ念ヲナシテ極楽ニ往生シタル  
人」として、空也上人・千観阿闍梨・三河入道寂照・内記入道保  
胤・源信僧都・永観律師などが挙げられている。いずれも『発心  
集』に記載されている人々であるが、特に、卷二前半に連続して永  
観・寂心・寂照三人の出家往生譚を並列させた手法は見事である。そ  
れは、卷一の巻頭に玄奘僧都を据え、続いて平燈供奉・千観内供・

増賀上人と豪華メンバーを登場させた卷一との調和を図るための編  
纂意識であったと思われる。次に、卷二の構成を要約すると、およ  
そ七条挙げることが出来る。

①保胤(寂心)及び定基(寂照)説話は、長明自身の執筆と考え  
られる。長明が最も傾倒し、敬慕した人物は保胤・源信であっ  
た。『日本往生極楽記』・『往生要集』などは長明必携・愛読  
の書であったに相違ない。そういう面から勘考すれば、尊敬す  
る保胤に師事した定基、彼は源信にも法を習ったという。長明  
の尊崇する保胤・源信に関する説話は、長明の筆録と推断して  
差支えないであろう。

②卷二は八坂山天台▽関係僧侶の出家往生譚が主体である。

③全般的に小話を集録して排列してある。

④小話の内容が比較的平板であり、小話の分け方が卷五と類似  
している。

⑤保胤・定基説話以外は、端的に言えば後人による竄入、増補が  
濃厚である。

⑥卷一の説話評論が注目すべき内容であるのに対して、卷二の説  
話評論は僅少であり、あるいは、評論部が欠如している。

⑦底本とイ本(神宮文庫蔵写本)の記事の有無が顕著である。

### 三 『今鏡』と『発心集』巻五

『発心集』(巻五)の53 54 55 56 57の五話は『今鏡』系統の説話で  
ある。主として貴族の子弟の発心譚であり、前述の卷二と対照的な  
編纂である。先ず、53「少納言公経依先世願作河内寺事」の本文  
と、『今鏡』の本文とを対照させて異同箇所を表示したい。

発心集(校註鴨長明全集本)  
少納言公経と云ふ手書有りけり。

あがためしこの比、心の内に願を発して、若しことよろしき国給りなば、寺作らんと思ひけるを、河内と云ふあやしき国の守にりたりければ、本意く覚えて、さらばふるき寺などをこそは修理せめと思ひて、国に下りにけり。さて其の国の中にこゝかして見ありけるに、或古き寺の仏の坐の下に文の見えけるを披きてみれば、沙門公経とかけり。あやしみて細かに見れば、こん世に此の国の守と成りて、此の寺を修理せんと云ふ願をたてたる文にてなん有りける。是を見て、然るべかりける事と思ひしりて、望の本意ならぬ事をもいさめつゝ信をいたして修理しける。書きたる文字の様なども、今の手に露ほどもかはらず似たりけり。伏見の修理のかみの様に、昔同じ名をつけるなりけり。(後略)

『発心集』の傍線部アイウエの箇所は、『今鏡』に見えない。『今鏡』の本文は全般的にブツブツ切れているため、『発心集』の作者が補足している。補充部分を除くと、説話としては明確に『今鏡』からの直接書承と考える。波線部A Bは語句が異なっている。『発心集』では末尾に説話評論があるが、『今鏡』にはない。波線部C

今鏡(日本古典全書本)

公経と聞えし手書き、県召に、ことよろしき国の司になりたらば、寺なども造らむと思ひしを、河内といふあやしき国になりたれば、かひなし。古寺などをこそは修理せめと思ひて、見歩きけるに、ある古寺の仏の座の下に、文の見えけるを披きて見れば、「沙門公経」と書きたる文に「来む世に、この国の司になりて、この寺修理せむ」といふ願立てたる文見てぞ、「然るべき契りなりけり」といひける。書きたる文字の様なども、似たる手になむありける。伏見の修理太夫俊綱のやうに、同じ昔の名をつけるなるべし。

(傍線は筆者による)

は伏見修理太夫のことを取り扱っているが、伏見の修理に関する説話は『今鏡』(藤波の上第四)「伏見の雪のあした」の章に収められている。『発心集』が伏見の修理のことに触れているだけでも、本話が『今鏡』からの伝承であることを物語っている。公経の類話は『宝物集』(九冊本巻六)にも見える。大外記定俊・手書の少納言公経・尾張の国俊綱聖人の順で説話が排列されている。本文は部分的に同文であるが、冒頭文と末文を左に示してみよう。

手書の少納言公経とて有し人、受領になるべき事ありけるに、よき国になりたらば、今生のたくはへに、一堂建立せむと思ひける(中略)公経、我身をむかしの公経聖人と云事をしりて、供養をとげおほりぬ。

『宝物集』の公経説話構成上の典拠は『今鏡』と思われる。なお、『発心集』53 54の排列順序は、『今鏡』と逆である。

54「少納言統理遍世事」説話の内容は、統理は年来の望みにより、関白道長の許可を得て増賀のもとで出家した。出家後、別れた臨月の妻を思い悩んでいた時、増賀が同情して都で祈り産養を行なってくれた。出家後、三条天皇と和歌の贈答を行なって、増賀に叱責されたという。総体的に『今鏡』と酷似している。ただ、和歌の贈答部分に若干の異同が認められる。記載順序が反対である。

55「中納言願基出家籠居事」の説話については拙稿「願基中納言出家説話をめぐって」をご覧いただきたい。『発心集』の本話を要約すれば次の通りである。

①白居易の詩「古墓何世人。不知姓与名。化為道傍士。年々春草生」を常に愛誦。

②「罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばや。」……

③発心の理由(後一條天皇崩御以外の理由を明記)例えば「心は

此の世のさかえを好まず、深く仏道をねがひ、菩提をのぞむ思のみ有り。」

④「忠臣は二君に仕へず。」……

⑤和歌の贈答（上東門院彰子）

⑥出家後、大原の閑居を訪れた頼通に俊実依頼の事。

一般に頭基出家簡居説話の構成に伴なう排列順序は、『古事談』型の④③①②⑥排列が主体であると思われる。『発心集』の排列順序は異なっている。頭基説話は、先ず『純本朝往生伝』収載の記事③①④に『江談抄』の記事②が付加され、次いで⑥の増補説話が創作挿入され、最後に『栄花物語』など記載の⑤の話が加えられ説話が完成されたのである。『古事談』の書承説話の編者源頭兼によって個々の書に載る説話が書き抜かれて、巧みに排列され創作されて頭基出家簡居説話が形成されたのである。それを承けて、『発心集』が六項目具備の完形説話を集大成したのである。従って、『発心集』の本話は、『純本朝往生伝』及び『古事談』から直接書承したと考える。『今鏡』では（すべらぎの上第一）「望月」の章の記事が⑤、（藤波の中第五）「苔の衣」の章が③の記事である。『今鏡』と『発心集』との直接関係は⑤の記事と言える。

53「成信重家同時出家事」説話は、『今鏡』では「苔の衣」の章で頭基出家を記し、そのあとに高光出家の記事、続いて成信・重家出家譚という順序である。『発心集』の本話と『今鏡』とは排列順序が異なっている。説話の分量は『今鏡』（日本古典全書本）が22行、『古事談』（新訂増補国史大系本）で9行、『発心集』（鴨長明全集本）で33行と、かなり増補された形跡が濃厚である。しかし、『発心集』の本話は、部分的に『今鏡』と同文である。従って、『今鏡』を主、『古事談』を副として、両書からの直接書承と考えたい。

照中将成信、光少将重家の出家事情と状況は藤原行成の日記「権記」（長保三年一月三日・四日・五日・十四日・三月五日・二十一日・四月一日・七月二十五日の条）に詳述されている。『古事談』（第一）収録の本話は「愚管抄」（巻第四）と関係あると思われる。

57「花園左府詣八幡祈往生事」の前半の条は『今鏡』にない。後半の説話は『今鏡』と部分的に同文であり、直接関係があると考えられる。源有仁（花園左大臣）に関する個々の説話は、『今鏡』の随所に収録されている。特に「御子たち第八」に多い。『発心集』前半の話も、『今鏡』中の個々の有仁説話を集めて増補挿入されたものと思う。

さて、『発心集』巻五の思想的構造については、藤本徳明氏のご示教によると、53が現世の否定、54 55 56 57が貴位の否定とすることである。統理は叡山、頭基は大原、成信・重家は三井寺へと出家遁世を遂げたのである。巻五の巻頭は唐房法橋（行円または行因とも号す）の発心譚であるが、彼は巻二・四永観律師の伯父に当る。巻二と巻五の対蹠的構成はここから始まる。行円は園城寺派の慶祚に師事したことが本話に見える。この三井寺慶祚の話は、56成信・重家の同時出家にも見え、彼ら二人の剃髪はこの慶祚である。巻二安居院、巻五三井行円と、両巻とも天台系の僧侶説話を巻頭に排列して、両巻には天台系説話の多いことを示唆している。換言すれば、巻二は八坂山天台系、巻五は三井寺系が顯著と言えるのではあるまいか。巻五は巻末62が正算（勝算）僧都の説話で、彼は後に園城寺長吏となった人である。巻六の巻頭63が三井寺證空の説話と三井寺系が続く。

頭基出家説話の中に「大原」が出てくるのは、長明の大原隠棲と関連する場所で、興味深い説話である。頭兼の資料に基づいて構成

したのが顕基説話であるに相違ない。

巻五で留意すべきことは、57花園左大臣有仁が、石清水八幡に七夜参詣して往生を祈願する説話に、石清水別当光清が関わることである。この説話は明らかに『今鏡』に類似している。光清の記事は『今鏡』に類出する。例えば、「敷島の打聞」の章には、娘の小侍従と妻の小大進に関する説話が採録されている。小大進は有仁の女房である。小大進が光清の許へ嫁ぐ説話は『今物語』に見える。一方、この有仁に関する説話では「伏し柴」の章（御子たち第八）が、待賢門院女房加賀（ふし柴の加賀）の話である。著明なこの説話は『今物語』に採られている。『今鏡』の作者を藤原為経（寂超）と想定した場合、『今物語』の作者信実は孫である。原田行造氏のご示教によると為経と、その子隆信と長明との交流が、『今鏡』と『発心集』との伝承関係の経路と考えられるのである。

#### 四 結 語

『今鏡』の成立年代及び作者については、夙に山口康助氏のご論考に継述されている。また、板橋倫行氏校註日本古典全書本『今鏡』解説、松村博司博士「歴史物語」（瑞書房刊）等にも詳述されている。

かつて、和田英松博士は藤原為経（寂超）説を提唱、これを承けた山口氏の綿密な調査によって、今日までは為経説が最も有力である。それに関する氏のご説を一一引用すると、

- ①『今鏡』に比較天台関係の記事が多く、しかも反南都の空気が強いこと。

②全体に天台止観尊重の気分が溢れていること。  
など挙げておられる。叡山天台関係の記事が多いことは『発心集』も同様である。『今鏡』と『発心集』の密度の濃い関連を解く鍵は、八

山天台▽大原にあると言えよう。

長明は『無名抄』の、「石川や瀬見の小河の事」「隆信定長一雙の事」などで、しばしば藤原隆信の記事を載せている。隆信は俊成の養子定長（後に出家して寂蓮）と比肩されたほどの優れた歌人であり、また、似絵の名人でもある。隆信の母（美福門院女房加賀）は、為経と結婚して隆信を生み、後に俊成に再嫁して定家を生んでいる。従って隆信は定家の異父兄に当る訳である。一方、俊成は為経の妹（姉か）と結婚している。当然、為経・隆信達は御子左家と親交の間柄にあったと言える。『無名抄』によると、長明は多くの歌会に出席している。例えば、治承二年（一一七八）から九月頃にかけて、九条兼実家で行なわれた百首歌（散佚した歌会）、後京極良経家で行なわれた建久四年（一一九三）の六百番歌会、正治二年（一二〇〇）十二月八日の土御門内大臣（源通親）家影供歌会、建仁二年（一二〇二）三月二十二日後鳥羽院の仙洞御所で行なわれた三体和歌などに出席している。

従って、御子左家の俊成・定家、九条家の良経・慈円、土御門家の通親、藤原隆信などと親交があったと考える。隆信の父為経との交流もあったと推察される。長明は為経（寂超）の所持していた資料（『今鏡』など）を使用し、その中に描かれた人物を探索したと考えられる。長明自身に合致した人物を『発心集』執筆に当って、構想の中に組み入れたのであろう。一時、洛西大原に隠遁していた長明は、為経など大原の隠者との深交もあったと思われる。△叡山天台▽関係説話の伝承経路は、為経（寂超）など大原の隠者達、△三井寺▽関係説話は、例えば、良経の子、良尊・道慶など九条家出身者がたびたび三井寺長吏に任ぜられていることなどから、三井寺と関係深い九条家側から得た伝承と推定される。

注1

山内益次郎氏「中世初期における今鏡本文の考察」(日本文字研究資料叢書『歴史物語』Ⅱ所収)昭和四十八年七月有精堂刊。氏は『発心集』八章の全文と『今鏡』皇山本・尾張本との異同を対照比較した結果、「発心集が引用した今鏡の本文は、尾張本に近いが、同時に皇山本の性質もあわせもっていたと考えられる」と述べておられる。

注2

築瀬一雄博士『鴨長明の新研究』昭和三十七年十月風間書房刊所収「発心集研究序説」参看。また、博士は「『発心集』は、現在の八巻の中の前六巻、しかもその偶数巻の末尾から増補部分を除いたものを、長明編集の原形に近いものとすべきである」と述べておられる。(『方丈記解釈大成』解説)

注3

以下「往生伝」は、井上光貞氏大曾根章介氏校注『往生伝・法華験記』(日本思想大系7)一九七四年九月岩波書店刊を使用した。

注4

続群書類従本に拠る。

注5

古典文庫本に拠る。

注6

拙稿「頭基中納言出家説話をめぐって」(『説話文学研究』第八号収載)昭和四十八年六月説話文学会刊。

注7

山口康助氏「今鏡作者考」(日本文字研究資料叢書『歴史物語』Ⅱ所収)昭和四十八年七月有精堂刊。

注8

『宝物集』に、出家遁世して大原に籠居した大原三寂、すなわち寂念・寂然・寂超の三兄弟伝が記してある。また、『本朝世紀』(康治二年五月十日の条)にも為経出家、天台山に登った記事が見える。

(金沢工業大学助教授)